

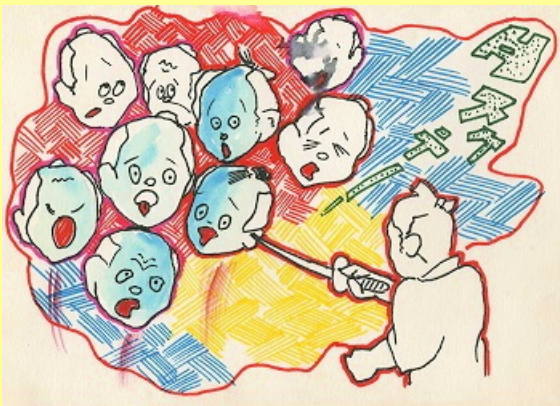
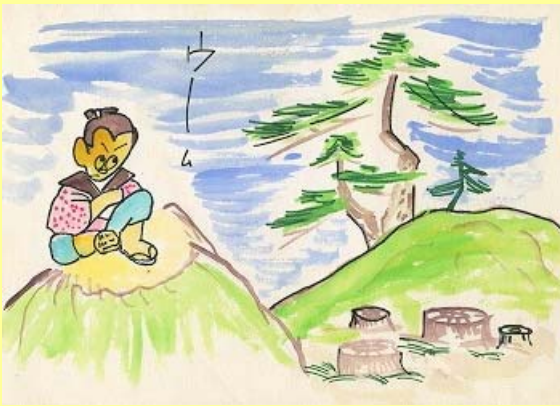


東浦の阿曾という所では その昔 塩を作っていた。塩作りにはたくさんのマキを使うため、その村には木がほとんどなくなってしまう、残すは 代官の山の木だけとなっていた。そこで村人は 代官に木を分けてくれるようにたのんだがことわられたため、ある日こっそり木を切ってしまった。

あくる日 代官はたくさんの切り株を見てだれのしわざだろうと思った。

「だれだ！ おれ様の木を切ったのは 名のれ！」

と、おそろしい顔をしておこり 刀をぬいて村人をおどかし 皆んなをふるえさせた。



「でんせつのいし」

阿曾の民話

村人の中に 働きもので 皆から好かれていた「彦右エ門」という人がいて このままでは村人みんなが殺されてしまうと思い 一人で罪をかぶり 首をはねられてしまった。

彦右エ門は罪人としてあつかわれ 墓を建てることも出来なかった。そこで村人は 道端の石をお墓の代わりに それとなくおがむことにした。代官に見つからないように その石をみがいたり 花をそなえたりした。村人は その石の前を通るたびに 手を合せ 涙を流した。そして心から感謝した。

その石はいまも残っている。咲き乱れた野花の中のその石は いつごろから「馬塚」と呼ばれるようになった。名もきざまれてない馬塚は むかし栄えた利棕峠にあり 今はその峠を通る人も少なく ペンペン草が生えている。



「でんせつのいし」

阿曾の民話